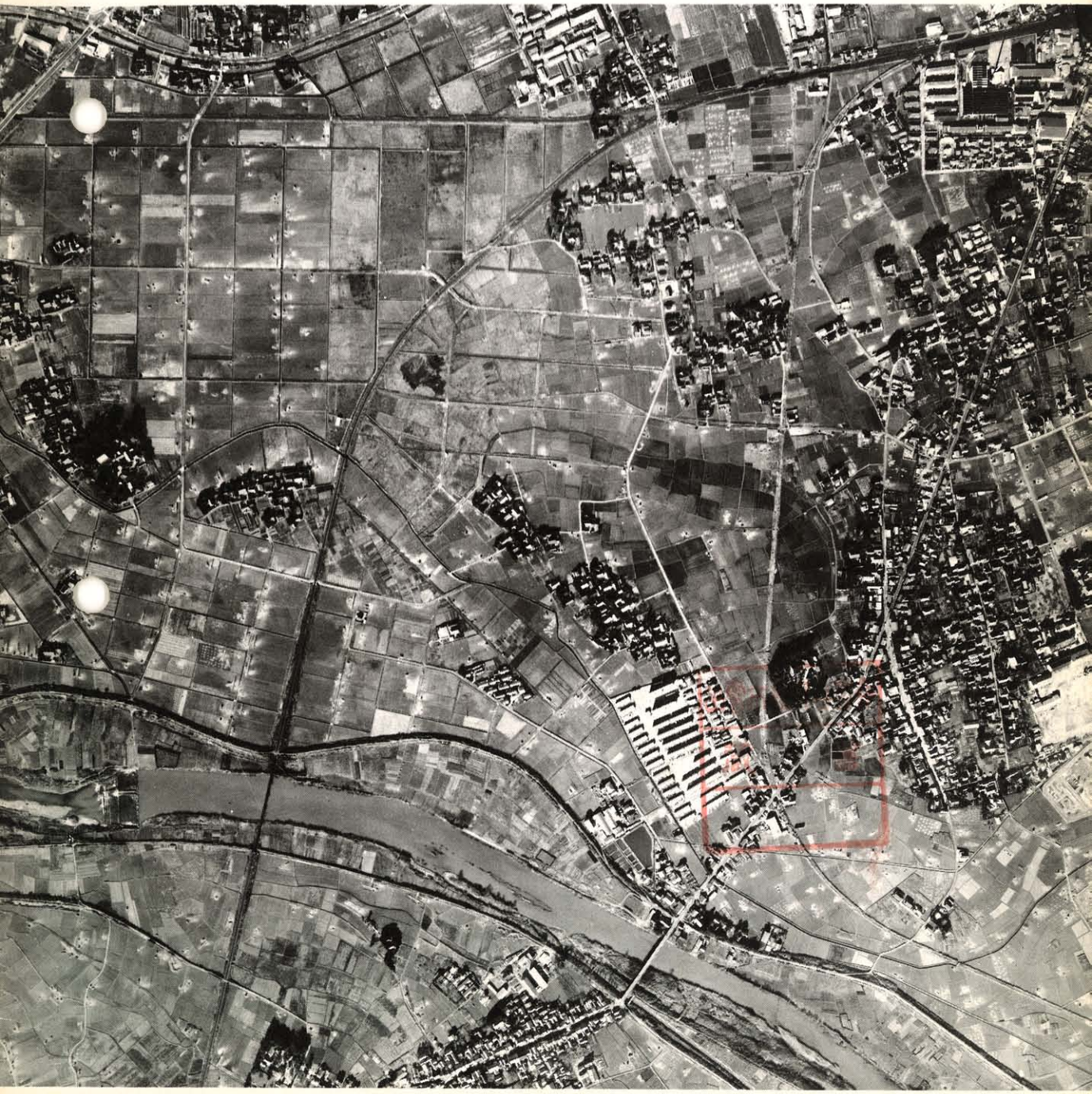
出雲市天神遺跡

調査の記録



はじめに

都市化に伴う開発による遺跡の破壊は多い。島根県中央部に位置する出雲市でも、その例にもれず近年における市街化の進展には著しいものがある。

そうした場合、地下にねむる遺跡は、古墳と違って外見では判断がつきにくく工事中に発見されることが多い。しかし、工事がいったん始まってしまうとなかなか工事を中止して調査を実施することは難しい。

天神遺跡は、出雲市が実施した出雲市天神町の海上地区土地区画整理事業中に見つかったものである。幸い、一部についてではあるが、工事を中止して、急拠発掘調査をすることができた。この小冊子は、その調査の記録である。これが、今後の都市計画事業および学術上の資料として多少なりとも役立てば幸いである。

なお、発掘調査にあたって、協力いただいた関係者の方々に厚く御礼申しあげる次第である。

図1　遺　跡　の　位　置　（○印は天神遺跡）

調査に至る経過

昭和46年12月24日、島根大学々生西尾克己君から島根県教育委員会に出雲市海上地区土地区画整理事業場で、土師器の高坏片，壺片などの遺物を採集したという連絡があった。そこで、同教育委員会文化財保護主事門脇俊彦が現地に赴き、同年12月28日29日の２日間、遺構残存状況、遺物散布状況を調査した。その結果、遺構残存状況が良好である個所が確認されたので事前緊急調査をすることになった。

調査主体は出雲市で、事務局を出雲市教育委員会に置き、門脇俊彦が発掘担当者となって行った。調査は昭和47年１月12日から24日までの間行ったが、門脇の都合で、16日以降は研修員勝部昭が主として調査にあたり、文化財保護主事近藤正の協力を得た。

調査対象地は、道路の新設される６m幅部分のうち遺構の認められた６カ所である。遺跡は、工事中発見されたという事情から、調査は工事の進行に追われる始末で、遺構と思われるものが発見されても十分な調査が実施できなかったのは惜しまれる。

遺跡の位置

遺跡は、島根県出雲市天神町字松下445-３番地他にある。すなわち、国鉄山陰本線出雲市駅の西方1.2km、市街の家並を外れたところにあり、島根県農事試験場、出雲農林高校天神寮、天満宮、郡是製糸工場によって囲まれる東西およそ450m、南北350m以上の範囲にわたる。海抜８mの低地に立地しており、地目は水田ないし畑であるが、周囲より少し高いいわゆる微高地である。このあたりは、神戸（かんど）川、斐伊川の２大河川がつくる沖積地である。天平５年（733）に勘造された『出雲国風土記』によれば、当時、斐伊川（出雲の大川）は、神戸水海に注いでいたというから、斐伊川と神戸川にはさまれた地域であったといえよう。ともかく、県下最大の平野、出雲平野の中央部分にあたる地域である。

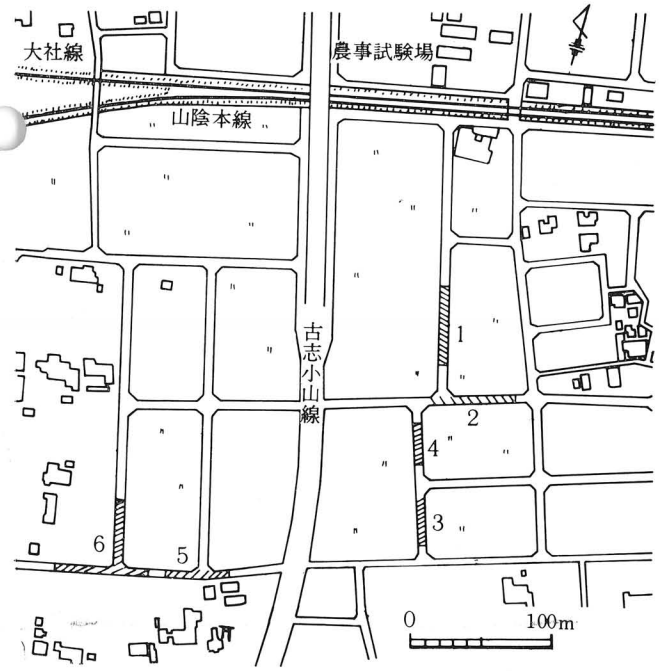


図２　発掘調査地区配置図（数字は調査区をあらわす）

周辺の主要な遺跡としては、

矢野貝塚、多聞院貝塚、原山遺跡などの弥生時代遺跡や金銅製冠出土の築山古墳、出雲国で最大の前方後円墳(全長80m)である大念寺古墳その他宝塚古墳、妙蓮寺古墳等[注1]古墳時代後期の大型古墳が知られている。この付近の古墳は、墳丘の形という観点から見れば、東の松江市付近に前方後方墳、方墳が多く分布するのに対し、前方後円墳、円墳が多く、出雲地方の東部と西部とでは古墳文化の様相が異なる面のある[注2]ことが示されている。

これらの遺跡は、この地域に弥生時代から古墳時代以降かなりの集落が営まれたことを示している。縄文時代の遺跡は今のところ数少ない。

なお、天神遺跡の所在する付近は、加藤義成氏によれば、『出雲国風土記』(天平5年)記載に見える「高岸郷。郡家の東北二里なり。……云々」にあたる地域と推定されている[注3]。

遺構と出土遺物

第1調査地区

ブルドーザーが耕土を排土したあとに、壺棺墓、柱穴を伴なう竪穴遺構が見つかったところである。

壺棺墓　　幅1m、深さ15cmの溝に続いておよそ1.5mの隋円形、深さ50cmの掘り形の土壙に、壺棺が横におかれていたものである。壺は。口径27cm、高さ58cm、胴の最大径38cm、底径10cmの暗褐色をしたもの。口縁には刻み目があり、頸部には指頭圧痕による貼りつけ突帯、肩部に2列の櫛による刺突文があるもので、八束郡美保関町小浜洞窟遺跡[注4]出土のものに類似する。弥生時代中期後半ごろのものと推定される。

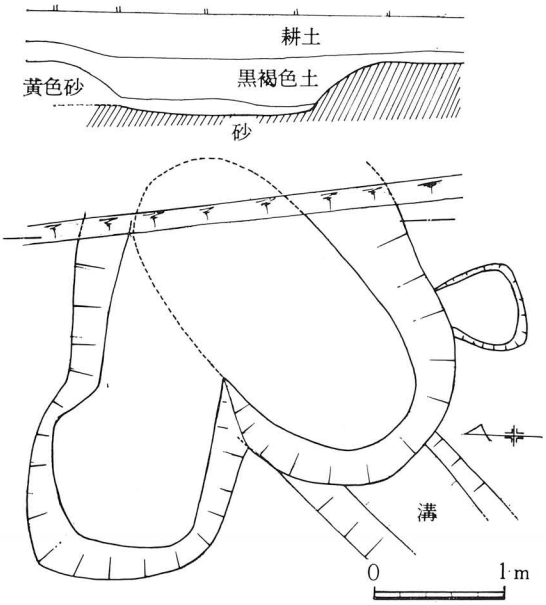
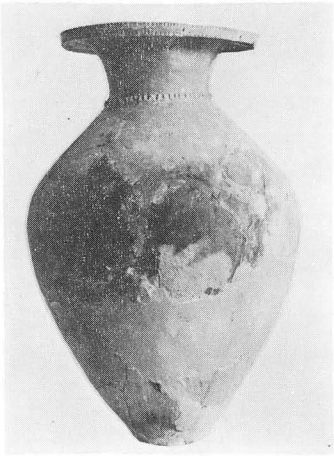


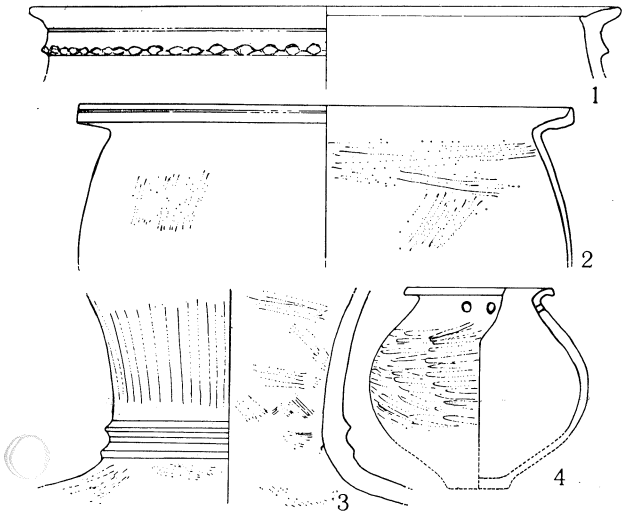
図3　壺　棺　墓



壺　　棺

溝　　幅30cm、深さ20cm位の、断面がU字状をなす溝で、その中から弥生時代中期後半ごろの壺片が出土した。

柱穴を伴なう竪穴遺構　長径4.3m、短径3.65mの隋円形プランを有する深さ60cmばかりの浅鉢状の竪穴で、周囲には、この竪穴の上屋を支えたと思われる径25～30cm、深さ10～20cmの柱穴が8個検出された。竪穴内には、植物質の炭化したものが多量に認められた。土師質土器片、土錘片などが出土している。中世の遺構であろう。



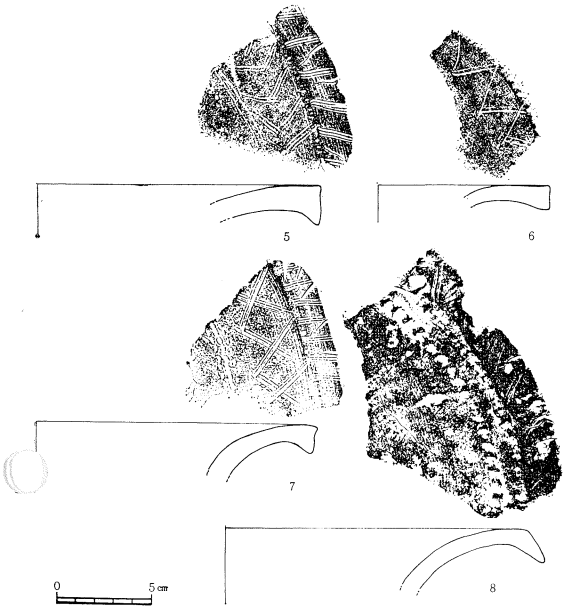


図4　弥生式土器実測図

第2調査地区

弥生時代中期後半ごろの溝と推定される遺構が検出されている。工事の都合で遺物の採集にとどまった。出土遺物には、弥生式土器の壺、甕、紡錘車などがあり、相当の量にのぼる。顕著な遺物の例としては、口径8cm、高さ10.5cm、頸部に1対2孔の小孔を穿った短頸壺、石製で鋸歯状文を施文した紡錘車がある。前者は、蓋を緊縛する壺で、種籾を収納する器とも解されている。[注5] なお無頸壺であるが口縁部に小孔を有する例は、隠岐郡西郷町月無遺跡にある。後者のような石製紡錘車の出土例としては、出雲国庁跡出土のものなどがある。

第3調査地区

径30～60cm、深さ約20～40cmのピット6個と幅30cmの溝状遺構が検出されている。さらに、溝や土壙らしいものも認められている。ピットから遺物は出土しなかった。溝のうちのあるものからは、弥生時代中期後半に見られる肥厚する口縁に3本一組の櫛による斜

格子文や刻み目を施す壺片が出土した。土壙からは、古墳時代の土師器，すすが付着したかまなどが出土した。

第 4 調 査 地 区

古墳時代後期以降の溝と推定される遺構が認められた。溝の幅は4.6m、深さは最も深い部分で1.2m、断面の形状は、2段に落ちこみをもつU字形である。溝内からは図5に示す完形に近い土師器高坏やまりなどが出土した。高坏は朱色塗彩され、坏の口径12cm、高さ12cm、坏の内面には放射状のヘラみがきがある。まりは口径11cm、高さ9cm。色は赤褐色一部黒色のもので底部に近いほうの外面は刷毛による整形痕があり、内面は削って器厚を整えるものである。

第 5 調 査 地 区

この地区は、天神遺跡発見の端緒になった場所である。径30～50cmの柱穴が10個以上あり、列をなしてまとまりを示し、建物址があったことが推定される。また幅30～50cmの溝が3本あり、それが1カ所で結ばれる形で検出された。出土遺物は、須恵器の壺片、蓋坏片、土師器の壺、高坏片などであり、古墳時代後期・年代的には6世紀後半以降のもののようである。

第6調査地区遺構と関連する遺構とも思われる。

第 6 調 査 地 区

発掘に先だち小試掘壙によって遺構の存在が確認された地区で、今回の調査では最も特筆すべき遺構が検出された地区である。他の調査区はすべて水田であったところであるが、この調査区は、柱穴が多数認められた北側を除いては、周囲の水田より一段高い畑であったところである。

図8のように逆T字形をなすトレンチ部分の調査を行ない、東西方向は諸般の事情でグリッドによる

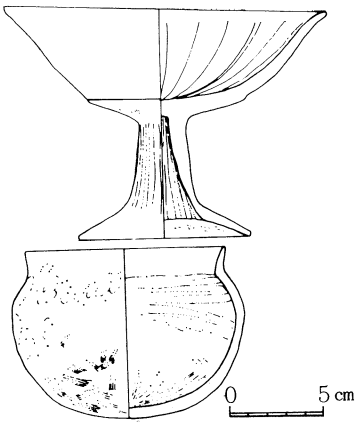


図5　第4調査地区溝出土土師器

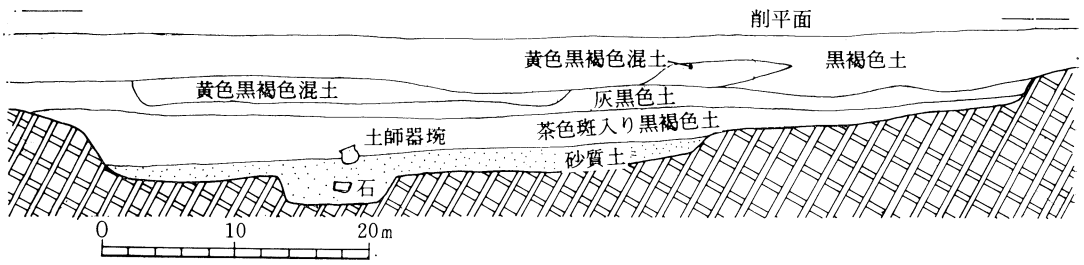


図6　第 4 調 査 地 区 溝

区域設定をおこない（図５参照）、畦はそのまま残した。

調査の結果は、時期的にいくつか重複する遺構が検出された。まず、東半部についておよそ考えられる遺構を抽出して記すと次のようである。

建物址Ⅰ　径約70㎝、深さ30～40㎝の柱穴が３個１列に南北方向に並んでいる。柱間距離は、2.0ｍで２間が数えられ、東側にさらに続きの部分が考えられる建物であろう。

建物址Ⅱ　２列３対６個の柱穴が、検出された。これはその一部で、柱穴の径は70㎝、深さ40㎝あり、その柱穴の規模は建物跡Ⅰとほぼ同様である。南北方向の柱距離190㎝で、東西方向の柱間距離180㎝＋270㎝である。

柵　60㎝幅で２列の15～20㎝程度の浅い穴が連らなるものである。何か建物の遮蔽的、区画的なものを暗示する。

溝Ⅰ　南北方向に走る溝である。幅１ｍ、深さ30～40㎝位のＵ字形の断面を呈するものである。溝の中からは、須恵器の高坏、壺、蓋坏、土師器の壺、盤など多量の土器片といくつかの栗石が出土した。

出土遺物のうち年代推定の重要な手掛りとなるものは須恵器の坏・蓋類である。ひとつは、図７の７のような山陰の須恵器第Ⅳ形式に属するものであり、もうひとつは、図７の４、５に見られる高台付蓋坏である。高台付蓋坏の蓋は、輪状つまみのものと宝珠

第６　調査地区発掘状況（建物址と溝）

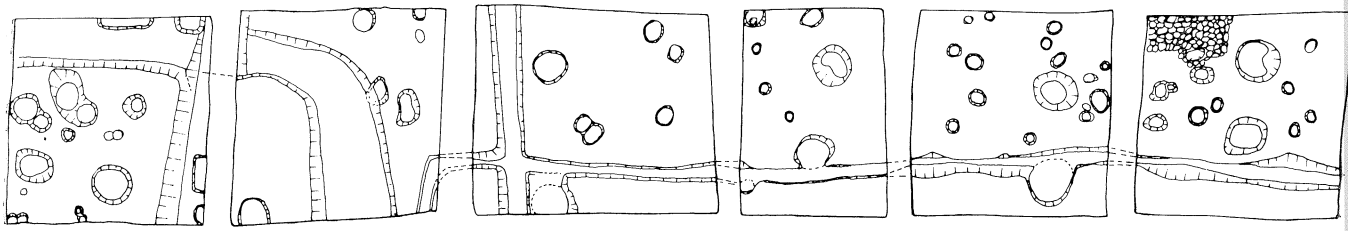
状つまみのつくものの両方が出土している。これらの類品は、出雲国庁跡、出雲国分寺跡、狐谷横穴群、隠岐御波横穴群[注6]等から出土している。土器の特徴をなお細かく見ると、蓋4は、ロクロ削りの頂部に輪状つまみをつけ、縁端部の内面にかえりをつける。かえりは、縁端面より高い。坏5は底部に外傾する高い高台をつけ底部と体部の境はやや丸味を帯び、全体を丁寧なロクロナデで仕上げる。糸切り技法は認められない。この土器は、出雲国庁跡出土の奈良時代須恵器の第Ⅰないしは第Ⅱ型式に比定しうるもの[注7]である。

次に、土師器についてみれば、図7の8、9のような皿が出土している。皿8は底部をヘラ削りし、底部縁端は指頭おさえのあとがある。口縁端は外反する。皿9は外傾する高台のつくもので底部と口縁部の境は丸味をおびている。このほか他に赤色塗彩の土師器片も出土している。

溝Ⅱ　溝Ⅰと交差するもので、溝Ⅰよりも後に掘られたものである。溝の斜面に礫が多数おいてあり、溝の底には白い砂があった。実際の流水を物語るものである。この溝は東の方で南に曲るものである。遺物は、溝Ⅰと交差する付近に、土製支脚、土師器・壺片が出土している。

北側柱穴跡　ブルドーザが排土したあとに現われたもので、遺物はほとんど採集されなかったので時期は不明である。約30㎝または60㎝位の大小の柱穴がおびただしく確認された。柱穴は、一直線上に並ぶものもあるが、建物規模を把握できうるほどではない。いくつかの時期のものが重複するものであろうが、建物址Ⅰ・Ⅱや溝Ⅰ・Ⅱよりは新しいかもしれない。

つぎに西半部の遺構について記すと、ここでも溝や柱穴群などが複雑に重り合って検出された。調査区域に限りがあったため遺構の性格その他については不明な点が多かったが溝は柱穴群に示される建物址をとり囲むもののように観察された。遺物は少なく中世のかわらけが発見された。



(西半部遺構)

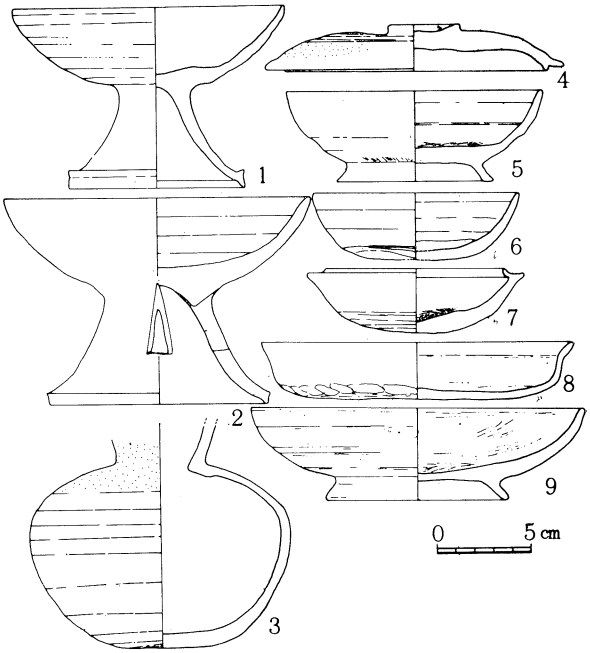


図7　第6調査地区溝Ⅰ出土遺物実測図（1～7 須恵器 / 8,9 土師器）

山陰の須恵器は、山本清先生によって四つの時期に分類されているが、そのうち第Ⅳ期の須恵器は坏・蓋類の型式を目安にすると、さらにいくつかの小時期に細分することが出来る。それによると、第6調査地区の溝Ⅰ出土の須恵器は大半第Ⅳ期の中でも最も新しい時期に属し、年代的には出雲国庁跡から発見された奈良時代須恵器の第Ⅰないし第Ⅱ期に該当する8世紀前半頃のものと推定される。この他、この溝からは破片であるが口縁部に放射状、底部に螺施（らせん）状の暗文を有する土師器も検出されている。

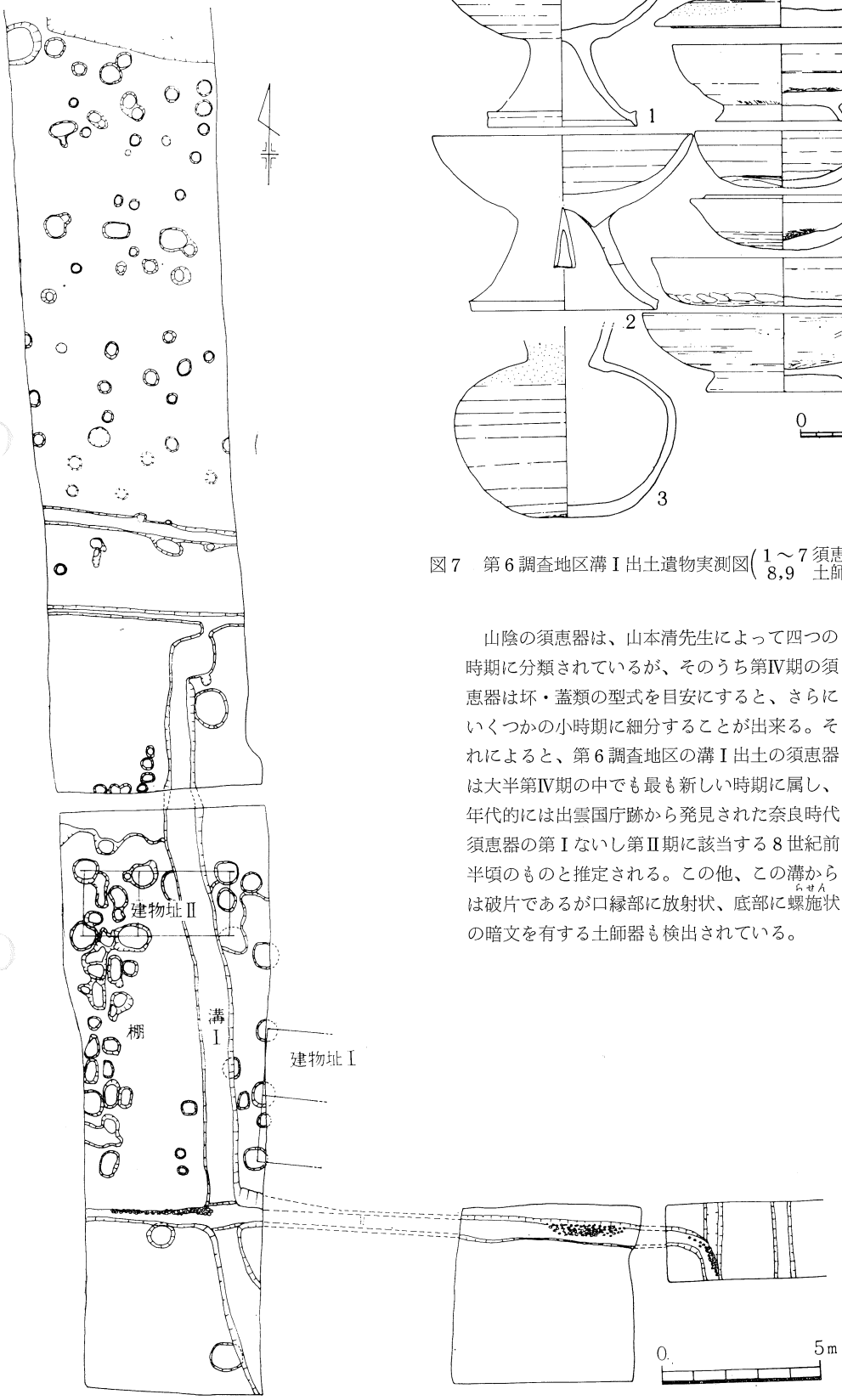


図8　第6調査地区遺構（東半部遺構）

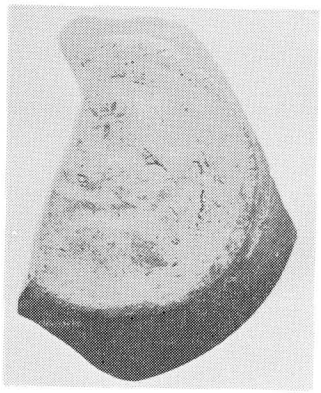
〔参　考〕

天神町宮小路出土墨書土器について

出雲市天神町森山善市氏が、昭和44年秋畑を耕作中に採集されたものであって偶然、天神遺跡調査中に筆者が同氏宅を訪れて実見したものである。

出土地は、第5調査地区の南々東約200*m*のところである。

墨書のある土器は、一部破損している土師器の皿である。口径14*cm*、器高2.7*cm*、器厚2～3㎜。口縁部は内傾気味に肥厚しており、底部は指頭により整形されている。底部外面を除く他の部分は、朱色塗彩され、内面底部は、そのハケによって塗彩されたあとが明瞭に残る。



墨書土器底部

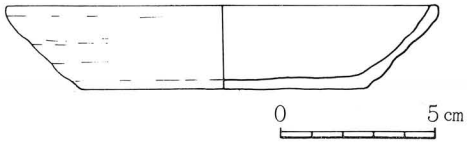


図9　墨書土器実測図

墨書は、底部外面にあり、「早□」と判読できるが第2字は不明である。同時に採集されたものに、朱色塗彩の土師器・皿2個体分などがある。口縁が開く浅い皿で糸切がないという器形の特色から平安時代ごろかと推定される。

今までに知られる県内の墨書土器出土例は、この他に出雲国庁跡、出雲国分寺跡、隠岐御波横穴が挙げられるが、それらは、いずれも須恵器に書かれたものである。

結　　び

今回の調査は、土地区画整理事業に伴う道路敷部分の調査で、遺構の一部を確認したに過ぎないが、次のようなことが注意される。

(1)　弥生式土器、土師器、須恵器等の破片散布状況から工事の実施されたほぼ全域にわたって埋蔵文化財が包蔵される土地であると推定される。調査した第1～6調査地区は、顕著な遺構が見られたところであり、それぞれの地区の遺構はいずれもかなりの広がりをもつものである。このことは、今後の市街化にあたっては事前に調査がなされねばならないことを意味するものであり、調査には相当の期間が必要であることを示している。

(2)　第1～3調査地区の付近は、弥生時代中期後半ごろの集落跡が存在すると思われる。山陰における集落跡の調査例は、倉吉市服部遺跡、米子市青木遺跡、福市遺跡、安来市八

脇谷遺跡等が挙げられるが、いずれも低丘陵上に作られた集落跡の調査例であり、平地に立地する場合の調査例は少ない。出雲平野での集落跡の調査は、矢野貝塚、多聞院貝塚程度で、それも限られた部分の調査に終わっていることを考えると、この天神遺跡のもつ役割は大きいといわねばならない。弥生時代の壺棺墓は、本県では初見のものであり、その付近で検出された溝は１つの区画を示すと思われ、遺構の全貌究明は極めて興味あるものである。

また、時代は下って完形のすすの付着した土師器かま（釜）の検出や、溝からの土師器・高坏、まりの検出は古墳時代の集落跡の存在を示すものである。平野の縁辺に築かれた大念寺古墳、築山古墳などこの地域最大級の古墳の被葬者たちの背景をさぐるに格好の遺跡でもある。

(3)　第５、６調査地区を中心とする付近は、出土遺物から推して、奈良時代から平安時代、一部は中世頃の建物址と思われる。径70㎝という柱穴の規模や、宮小路からの墨書土器の出土は、地方宮衙跡（郡家、郷倉、駅など）らしきものを思わしめる。もし、仮りにそうであるとすれば、この種の遺跡が全国的にみて、常陸国新治郡家跡、肥後国郡遺跡など[注8]わずかな調査例しかないことを考えると、古代政治と民衆の生活との関係を知るための貴重な遺跡であると思われる。

以上、述べたところから、この遺跡のもつ重要性は認識されると思うので、今後の開発にあたっては、慎重な配慮がなされねばならない。

注１　池田満雄「出雲地方における古代文化の展開」『日本考古学の諸問題』　昭39
　　島根県教育委員会『島根の文化財第３集』　昭38
注２　山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『山陰古墳文化の研究』　昭46
注３　加藤義成『校注出雲国風土記』　昭40
注４　山本清「山陰地方Ⅱ」『弥生式土器集成本編Ⅰ』　昭39
注５　桐原健「稲霊を籠める土器」『上代文化』第34輯　昭39
注６　山本清『隠岐古墳調査報告』　昭28
注７　松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』　昭45
注８　福山敏男「地方の官衙」『日本の考古学Ⅶ』　昭42

あとがき

昭和46年の暮れに発見されたこの遺跡は、正月早々に調査の準備を整えたものである。何分工事と平行しての調査であり、発掘区域も道路敷に限らざるを得なかったため必ずしも十分な成果を挙げることが出来なかった。加えて、雪が降ったり、雨の激しい日など悪天候が少なくなかった。

調査を進めていく過程で例えば工事区域外に伸びる遺跡の取扱いあるいは調査経費の負担など様々な点で考えさせられる問題があった。今後開発に伴う調査を行う上で検討されなければならない重要な課題の一つといえる。

なお、調査にあたっては多くの方々から多大な援助と協力を得た。ここに関係者を記し、感謝の意を表したい。

調査関係者

調査員　門脇俊彦（県教委社会教育課文化財保護主事）

近藤　正（　〃　）

勝部　昭（　〃　研修員）

調査協力　西尾克己　柘植早苗（以上島根大学々生）

川上　稔（法政大学々生）県立出雲高校社会部考古班員

事務局　平井辰郎　細木直幹　宍道行信（出雲市教育委員会）

編集・文責　勝部　昭

編集にあたっては前島己基の協力を得た。

昭和47年3月1日 印刷
昭和47年3月30日 発行

出雲市天神遺跡

発行 島根県出雲市
島根県出雲市今市町
印刷 株式会社 報光社